

方法としての有島武郎（2¹）

—「小さき者へ」をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯—

丁 貴 連

目次

序. 有島武郎とアジア

I. 白樺派の一人から一躍人気作家へ

II. 『有島武郎著作集』の反響と自信

III. 「小さき者へ」を巡る東アジア知識人の思想的共鳴

1. アジアからのまなざし

2. 魯迅の「小さき者へ」紹介とその受容

3. 李光洙の「小さき者へ」受容

(以上前号)

IV. 『小さき者へ』をめぐる同時代評

1. 安子の発病と死、そして残された子供達

2. 『小さき者へ』の発表と有島武郎の苛立ち

3. 一般読者の声

V. もう一つの同時代評—「小さき者へ」を訳した東アジアの読者たち

1. 魯迅はなぜ「小さき者へ」を訳したのか

1-1. 周作人の存在

1-2. 「処方箋」としての翻訳—中国伝来の悪しき疾患を癒す「小さき者へ」

2. 朴錫胤はなぜ「小さき者へ」を訳したのか

2-1. 1920年代の朝鮮文壇を虜にした有島武郎

2-2. 『宣言』への傾倒

2-3. 注目されなかった朝鮮語訳「小さき者へ」

(以上今号)

IV. 『小さき者へ』をめぐる同時代評

1. 安子の発病と死、そして残された子供達

1907年4月、4年間に渡るアメリカ留学を終えて帰国した武郎は、同年12月に母校の東北帝国大学農科大学の英語教師に任命されて翌1月に札幌に渡った。アメリカ留学帰りの武郎への周囲の評価は高く、武郎もその期待に応えるべ

く教育活動は無論、遠友夜学校長をはじめ社会主義研究会のリーダー、美術団体「黒百合会の代表を積極的に引き受けるなど学外の活動も熱心に取り組みつ、父の意向に従って陸軍少将神尾光臣の次女安子と1909年3月結婚し、公私ともに多忙な日々を過ごしていた。

しかし、心の中に様々な問題を抱え込み人生の歩みに悩んでいた武郎はしばしば「結婚を悔い」、子供たちの「誕生を悪んだ」。その間、妻の安子は気難しい夫のわがままにじっと耐えながら、碌々熟睡もできず愛の限りを尽くして年子の三児を育てた。その心労と過労とが原因となって、三男の生まれた翌年の1914年9月、安子はいよいよ結核に斃れてしまった。病状ははかばかしくなく、医者から転地療養を勧められた武郎は三児を生み育てた札幌から一家をあげて東京へ転居し、教授の職も辞めて看護に当たった。しかしその甲斐もなく、安子は一年七カ月間という長く辛い闘病の末、六歳と五歳と四歳の幼い三人の子供たちを残したまま帰らぬ人だったのである。

2. 『小さき者へ』の発表と有島武郎の苛立ち

安子の死から一年半足らずの1918年1月号の『新潮』に発表された「小さき者へ」は、まさにこの時の体験がリアルかつ充実に描かれた手記とも言える自伝的作品である。しかし「近來の佳作と云われる²」この作品は発表当初から

1 本論文は2018年度（平成30年度）科学研究費補助金（基盤研究C）「方法としての有島武郎—1920年代の朝鮮文壇における女性・子供・労働者の表象をめぐる」（課題番号15K02239）の成果の一部である。

2 江口渙「有島武郎論」（『文章世界』同年4月）ただし『有島武郎全集別巻』（筑摩書房、昭和63）480頁。

創作として取り扱われていることに違和感を示す声が上がったりしていた。そのことを強く意識していた武郎は、「小さき者へ」を含む七つの小品を収録した有島武郎著作集第七輯『小さき者へ³』（叢文閣、1918年11月）を刊行する際に『新潮』をはじめとする新聞雑誌に寄せた広告文の中で、「小さき者へ」は「私の体験が可なり直接に取り扱てある」が故に文壇の一部から「芸術と云ふ事が出来ないと非難された」ことを認めている⁴。以下はその全文である。

この輯には私の小品七種を集めた。ある物には私の経験が可なり直接に取り扱てある。文壇の一部では芸術と云ふ事が出来ないと非難されたものだ。ある物には私から思ひ切り飛び離れた生活が、私一個の批判の対象として寓意の賓主として描かれてゐる。これ又文壇の一部から生命のない平描として非難されたものだ。私は然し恐れないで其等の作品を私の著作集の中に組み入れる。何者私自身は是等の作品を恥じないからだ。而してそれは私の生活とはやはり分離する事が出来ないと思ふからだ⁵。

しかし、武郎は文壇の非難などには「恐れ」ず、むしろ非難を受けている「小さき者へ」と「動かぬ時計」などを創作として自身の7番目の「著作集の中に組み入れ」ただけでなく、作品集のタイトルに話題となっていた「小さき者

へ」を用いることによって、読者の懸念を撥ね退けたのである。それだけこの作品に自信があったということを意味するが、実は「小さき者へ」を書き上げた直後の武郎はあまり自信が持てず、札幌農学校以来の無二の親友で叢文閣店主・足助素一に次のような手紙を書き送っている。

僕は昨日朝からかゝて夜の二時迄に新潮の原稿より「小さき者へ」書き上げて送つておいた。まだ書き足りないが筋書きと思つてゐればいゝ。-読者の迷惑僕の方で我慢して置く-本にする時にあれ丈のものがあればしつかりしたものに仕上げて見せる⁶。

つまり、武郎にとって「小さき者へ」は「まだ書き足りない」粗削りな作品だったのである。「読者の迷惑僕の方で我慢して置く」と懸念していた通り、「小さき者へ」をはじめ一月に発表された「暁闇」<「迷路」続編>（『新小説』）と「動かぬ時計」（『中央公論』）に対する文壇の評判はあまりよくなく、武郎は足助素一宛手紙の中で、

一月の小説の批評が大分あちことで出てゐるがどれもこれもあんまり評判がよくない。馬鹿野郎奴、移り気な彼等はもう僕といふものを飲み込んだと思つてゐるのだ。そんなに易々と呑み込まれてたまるものか⁷

と、文壇への苛立ちを露わにしていた。

3. 一般読者の声

ところが、武郎の懸念をよそに、「小さき者

3 この著作集には以下の作品が収録されている。「An Incident」「幻想」「小さき者へ」「朝霧」「死」を畏れぬ男」「動かぬ時計」「戯曲 老船長の幻覚」

4 この広告文には、「小さき者へ」の他にも文壇から非難されたもう一つの作品にも触れられている。1918年1月発行の『中央公論』に発表された「動かぬ時計」である。武郎は「予に対する公開状の答」（『新潮』1918年10月）の中で、「（前略）唯岡野氏が云はれた「動かぬ時計」は私があのお老学者と十分同化もしないで、不遜にも平面描写的な試みをした爲めに死んでゐるやうです。私は書物として発表する時思ひ切つて私の主人公に対する態度を改めて見るつもりです」と答弁している。

5 有島武郎「『小さき者へ』広告文」（『文章世界』1918年11月）但し『有島武郎全集七巻』362頁。

6 書簡（『有島武郎全集十三巻』筑摩書房、昭和59年）525～526頁。

7 同上546頁。

へ」に対する好意的な批評が文芸誌を飾り始めた。その先頭を切ったのが菊池寛である。彼は『帝国文学』2月号に寄せた「一月の文壇—新潮、新小説、異象、女学世界、三田文学、早稲田文学、文章世界」の中で22編の作品の内「小さき者へ」を最初に取り上げ、「この作者の新年の物の内では此作品が一番良い」と高く評価してくれたのである。

これを皮切りに、五十嵐萬吉（「武郎氏の『小さき者へ』読後感」（『文章世界』同年3月）、近松秋江「文芸時事（お産の描写）」（『読売新聞』同年3月3日付）、江口渕「有島武郎論」（『文章世界』同年4月）らによっても取り上げられ、「小さき者へ」は次第に文壇の注目を集めた。

武郎がこれらの批評に目を通していたことは前述の広告文が雄弁に物語っているが、これらの批評と共に武郎には一般読者や知人、友人からの感想も多く届けられていた。次の文は、『新潮』が企画した「有島武郎氏に対する公開状」に応募した90余通の原稿の中から選ばれた6人の読者批評の中で、とりわけ「小さき者へ」に触れた3編の感想である。

あなたの「小さき者へ」を拝見した時、どつかに新しい自分を一人見つけた様な気がしました。その作品は全編強い愛と力とで書かれたものでした。好個の詩でした。小説とか感想とかいふ事なしに、一個の人の書いた文章として有難いものでした。私はあの一編を拝見したゞけで、あなたが自然とか、人類とか、社会とか、個人とかについてどんなお考を持つて居られるかが分かりました。そのお考は私を貫く考、広く世を貫くべき考なのです⁸。（YK

生⁹「果たして挿し木か」、下線は筆者)

今だに私は、あの『平凡人の手紙』『カインの末裔』『実験室』『迷路』『晝闇』『小さき者へ』等の諸作品を読んだ折の感激を忘れることは出来ません。自己の本質をも見ずに始終環境の爲めに動揺されて生きて来たやうな人間が、己の貧弱な経験を補ふ極めて月並み的な空想を以てするやうな創作を臆面もなく発表して来た、また現に発表しつゝあるわが文壇に、豊かな学殖を有ちて年齢も不惑の期に達してゐられるといふあなたが、同じ旗色の若き作家達の急先鋒となつて戦はれることは、読者たる私達の悦びである計りではなく、汎く文壇にもどんな新しい刺激を与えてゐるかわかりません¹⁰。（吉田爲之「芸術創作の態度」、下線は筆者）

殊に「小さき者へ」は涙ぐましい程愛に充ちて居ます。それも理智から来る苦しい努力の伴ふ愛でなく心のどん底から湧く無理の無い愛です。今私の居る室にグローブのベスタロチの画が掲げてあります。多勢の子供に囲まれ乍ら彼は微笑んで居ます。明浄な美と愛とが一面に漲つて居ます。この画から受ける感銘は貴方の作から受けるそれと大分似かよつて居ます¹¹。（山本方平「明浄な美と愛」）

長い引用をしたのは、1918年当時の一般読者の中で武郎がどのような存在であったかを示したかったからである。この3編を含め公開状に寄せられた90余通の読者の感想は、「非難にせ

8 「有島武郎氏に対する公開状（募集公開状第一回発表）」（『新潮』1918年10月）。108～109頁

9 YK生は、「当選者の住所氏名」によれば、「東京下谷区練堀小学校 矢代龜廣」である。

10 「有島武郎氏に対する公開状（募集公開第一回発表）」（『新潮』1918年10月）112頁

11 同上、119頁。

よ称賛にせよ」、生前の武郎が夏目漱石没後の後継者と見做されたほどの若い知識層の読者から絶大の信頼を受けていた文学者であったという事実を強く裏付けている。

しかし、前述の足助素一宛に送った武郎の書簡が物語っているように、当時の武郎は文壇から「理解ある批評にめぐまれなかった状況¹²」下に置かれていた。「小さき者へ」の感想を述べてくれた知人の吹田順助宛に書き送った手紙には文壇への穏やかではない武郎の心情が読み取れる。

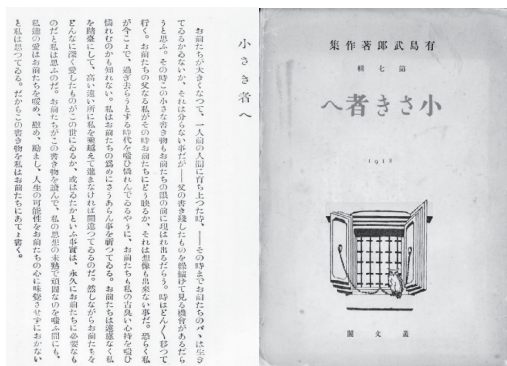
「小さき者へ」に対する存分な御感想を有難くうれしく拝見しました。あんな御言葉が私の事業の上にとどれ程の励ましであるかはあなた御自身想像がお出来にならないと思ひます。(1918年9月18日 吹田順助宛¹³)

菊池寛の好意的な批評と共に読者や知人、友人から寄せられた理解ある批評に自信を持つようになった武郎は、「小さき者へ」をタイトルにした有島武郎著作集第7輯を刊行したのである。「本にする時にあれ丈のものがあればしつかりしたものに仕上げて見せる」と足助素一に述べた通り、二度¹⁴に渡って入念な彫琢を加えられた著作集第7輯は批評家の間からも、一般読者の間からも再び注目を集めた。

V. もう一つの同時代評—「小さき者へ」を訳した東アジアの読者たち

前号で見てきたように、有島武郎著作集は大正年間を通じて、ベストセラーであると同時に

ロングセラーであったが、第七輯の『小さき者へ』も11月5日発行から僅か三か月後の1919年2月の時点で13版発行されている。山本芳明によれば、当時増版は一回につき500部が慣例なので単純計算でいけば、『小さき者へ』は6千5百部発行されたということになる¹⁵。



【図1】有島武郎著作集第七輯『小さき者へ』表紙と冒頭（叢文閣、1918年11月発行）

その後も好著な売れ行きを見せ、武郎没翌年の1924年1月時点で56版（2万8千部）発行されたが、この著作集を買った読者の中に中国と朝鮮からの留学生は無論、日本留学帰りの東アジアの文学者と知識人が多く含まれていた。しかも、彼らの中には単なる愛読者にとどまらず、「小さき者へ」に深く共鳴した余りに、中国語や朝鮮語に翻訳して自国の読者に広く紹介していた熱心な読者もいた。魯迅と朴錫胤なのである。

1. 魯迅はなぜ「小さき者へ」を訳したのか

1-1. 周作人の存在

魯迅と朴錫胤は、1919年6月から11月頃に

12 山田昭夫「解題」（『有島武郎全集3巻』）681頁。
13 「書簡」（『有島武郎全集十三巻』筑摩書房、昭和59年）615頁。
14 武郎は、1918年1月『新潮』に発表された「小さき者へ」を、同年3月白樺同人共著の『白樺の森』に「朝霧」と共に収録しているが、その際に1回目の加筆を行っている。

15 夏目漱石生前の書籍の発行部数を調べた松岡譲の『漱石の印税帳』（1955年8月）によれば、漱石没年の大正5年まで春陽堂から発行された発行部数は以下のとおりである。『虞美人草』8500部、『三四郎』4600部、『それから』3380部、『門』2700部である。この部数からも分かるように、有島武郎の作品が如何によく売れたことが分かる。大正13年1月時点で『小さき者へ』（56版）は、『宣言』（84版）『惜しみなく愛は奪ふ』（80版）『死』（74版）『生まれ出づる悩み』（74版）『或る女（前編）』（70版）『迷路』（62版）に次ぐ部数を誇る人気作品なのであった。

「小さき者へ」を読んでいる¹⁶。無論、二人が読んでいた「小さき者へ」は一年前に出版されたばかりの有島武郎著作集第七輯に収められたものである。当時、東京帝国大学法文学部に在学していた朴錫胤と違い、魯迅は7年間に渡る留学生生活を終えて1909年に帰国した後、杭州と紹興を経て1912年から北京に住んでいた。そんな彼が日本で出版されていた有島武郎著作集をリアルタイムに読むことができたのは弟の周作人の存在が大きい。

兄の後を追って、1906年に日本に留学した周作人は法政大学予科を経て立教大学で英文学と古典ギリシャ語を学んだが、帰国一年前の1910年に誕生した白樺派の人道主義に寄せられ、帰国後はすぐに『白樺』の購読を開始するほど、白樺派に傾倒した。中でも武者小路実篤の文学と思想に強い関心を示し、とりわけ「新しき村」は北京支部を設立するほど、その活動に共鳴し中国の読者にも熱心に紹介していた。

ところが、この「新しき村」を同人の武郎が「武者小路実兄へ」（『中央公論』1918年7月号）という公な場を使って、「如何に綿密に考慮され実行されても失敗に終わる」と批判して武者小路の反発を買うなど、文壇に波紋を巻き起こした。その文章を周作人が読んでいたかどうか確証はないものの、ちょうど1918年10月の周作人の日記には、注文していた白樺同人共著『白樺の森』（1918年3月発行）が10月23日に届き、翌日の「夜、『白樺の森』の中の「小さき者へ」等二編を読む¹⁷」と記されている。

16 魯迅は、「六十三『小さき者へ』」（『新青年』1919年11月）の中で「『我々はいまいかにして父親となるか』（『新青年』1919年11月号に掲載：筆者註）を書いてから二日目に、有島武郎の『著作集』のなかで『小さき者へ』という小説を読み、とてもいい言葉がたくさんあるように思った」（『魯迅全集1巻』学習研究社、1984年）と述べている。一方、朴錫胤は「小さき者へ」の朝鮮語訳を載せた『創造』（第8号、1921年1月）に、翻訳に至った経緯と感想を述べた付記「C兄へー翻訳3編」をも一緒に掲載し、「小さき者へ」をはじめて読んだのは1919年6月9日だと述べている。

17 周作人『周作人日記 上 影印本』（大象出版社、1996年12月）786頁。

周作人と言えば、武者小路との影響関係が注目されがちだが、実は、彼は武郎の情死が伝えられると、直ちに追悼文¹⁸を執筆し、武郎の死を「侮蔑」してはならないと中国の読者に呼びかけていたほど武郎に敬愛の念を抱いていた。その彼が武郎の作品の中で最も好きなものは、「当初『白樺』に載せていた『小さき者へ』の一編である¹⁹」。だが、周作人はこの大好きな作品を自ら翻訳せず、兄の魯迅に紹介し、それを読んだ魯迅が「とてもいい言葉がたくさんある」と『新青年』（1919年11月号）の読者に紹介したのはよく知られた話である。

(六三) 眞幼者

做了我們現在怎樣個父親的後雨，在有島武郎著作集裏，看到眞幼者這一篇小說覺得很有許多好的話。

「時間不住的移過去。你們的父親的，到那時候，怎樣映在你們的腦裏，那是不不能想像的。」大約像我在現在，在笑吟可憐那過去的時代一般，你們也要嘆息可憐我的苦楚的心態，也未知的我爲你們計，但願這樣子，你們若不是毫不客氣的擊破一個踏脚，超越了我，向着高的遠的地方進去，那便是一無所獲。

「人是很寂寞。我單能這樣說了就算罷，你們和我，像有過血的一樣，曾過愛了去，那時候將我的頭圍從寂寞中救出，勇氣很單。我愛過你們，而且永遠愛着，這並不是說，要從你們愛我的報償，我對於『教我學會了愛你們的你們』的要求，只是受我的感謝罷了……像埋藏了親的屍體，貯着力量的小獅子，一逞剛強勇猛，掙了我，踏到人生上去就是了。」

「我的『一生』，就令怎樣失敗，怎樣勝不了，諒說，但無論如何，便是一無所獲。」

【図2】魯迅「小さき者へ」部分訳と感想『新青年』（1919年11月）

『小さき者へ』の世界に深く共鳴した魯迅は、3年後の1922年に同じく子供をテーマとした「お末の死」（1914年作）を訳して『小さき者へ』とともに『現代日本小説集』（1923）に収録し、その3年後の1926年にも同様のテーマを扱った小品「小児の寝顔」（1922年作）を翻訳発表している。魯迅が『小さき者へ』を読みだした1919年頃は、『或る女』（1919）をはじめ『カインの末裔』（1918）『生まれ出づる悩み』（1917）『迷路』（1916）『宣言』（1915）など、武郎の代表作が出そろった時期である。

18 周作人「有島武郎」（『晨报副鐫』1923年7月14日付）。なお、武郎の情死に関する東アジアの読者の反応については、拙稿「有島武郎と朝鮮メディア—情死事件を手掛かりとして」（『多文化公共圏センター年報第8号』2016年3月）を参照。

19 周作人、前掲書註18に同じ。

1-2. 「処方箋」としての翻訳—中国伝来の悪しき「疾患」を癒す「小さき者へ」

しかしながら、魯迅はそれらの代表作にはほとんど関心を示さず、6年後の1929年に刊行した訳文集『壁下訳叢』に収録した六編の文芸批評も「宣言一つ」（1922）を除くいわゆる小品ばかりである。なぜ小説ではなく、子供をテーマとした小品や文芸批評を訳していたのか。その翻訳意図を知るうえで、周作人の「武者小路さんの『或る青年の夢』を読む」（『新青年』1918年5月）に刺激されて『或る青年の夢』を翻訳した魯迅が、翻訳に至る経緯を述べた「訳者序とその二」（『新青年』1920年1月）は示唆に富む。

全編のテーマは、自序ですでに述べられているように戦争に反対することであり、訳者がいまさら付け加えることもない。しかし私は一部の読者が、日本は好戦的な国で、その国民こそ本書を熟読すべきなのだ、中国になんでこんなものが要るのだ、と考えるのではないかと心配している。私個人の考えでは、全く反対である。中国人自身は確かに戦争は得意ではないが、決して戦争を呪っているわけではない。（中略）例えば今日日本が朝鮮を併合したことに話が及ぶと、よく「朝鮮は本来わが属国である」といった言葉が出てくる。このような口調を聞くだけでも、充分、人を恐れさせるに足りるのである。

それ故、私はこの戯曲が多くの中国旧思想の宿阿を治癒でき、その意味で中国語に翻訳する意義が大いにあると思うのである²⁰。（下線は筆者）

つまり、魯迅は単に反戦論を訴えた武者小路

の主張に共感したというだけではなく、「この戯曲が多くの中国旧思想の宿阿を治癒」することができると思ったから翻訳を行っていたのである。

この文章に注目していた山田敬三は、魯迅が武者小路の『或る青年の夢』を「中国に扶植しようとした最大の意図は、それが日本人の「獸性」をついたと同じ刃で、彼の愛する中国民衆の膿を切開してくれると判断したことである²¹」と指摘し、このような視点は同じく『或る青年の夢』に感銘を受けていた弟の周作人にはまったく欠落していた「魯迅固有のもの」であると主張している。

確かに、周作人と魯迅は文学によって中国の民衆を覚醒させようと努力してきた間柄である。しかし、周作人と違い、魯迅は自国民の「宿阿」、すなわち悪しき疾患を指摘する作品に共鳴し、それらを積極的に翻訳紹介していたのである。なかでも武郎の作品は、中国古来の家族制度にどっぷり浸かっていた中国人の精神改造を図ろうとしていた魯迅の問題意識と共有するところが多く、その影響は前号の翻訳リストが雄弁に物語っている。何よりも最初に訳した作品が「子供崇拜の思想」を訴える「小さき者へ」であったという事実が魯迅の危機意識を指摘せずにはいられない。

前号で指摘したように、かつての中国社会では、目上の人、年長の者への絶対的な服従と礼儀こそが徳目とされ、子供の存在を強調することは長らくタブーであった。こうした考えは近代に入ってから衰えることなく、むしろ子供を巡る環境は悪化していきばかりであった。そんな状態に危機感を抱いた知識人たちが1915年に『新青年』を創刊し、儒教道徳と家族制度から子供を解放せよと呼びかけた。その一人魯迅

20 魯迅著・藤井省三訳「訳者序とその二」（『魯迅全集12巻』（学習出版社、1985年）257頁。

21 山田敬三「魯迅と「白樺派」の作家たち」（『文学論輯』23号、九州大学、1976年3月）。後に『魯迅の世界』（大修館書店、1977）に収録。

が1918年、人が「人を食う」大家族制度の秩序と儒教道徳のなかに生きる「子どもを救え」と叫んだ『狂人日記』を発表し、中国社会を震撼させたことはあまりにも有名な話である。それほど当時の中国知識人にとって子供問題は早急に解決せねばならない悪しき疾患の一つであったが、その「疾患」を治癒する「処方箋」の一つとして、魯迅は武郎の「小さき者へ」を中国に翻訳紹介したわけである。

2. 朴錫胤はなぜ「小さき者へ」を訳したのか

ところが、魯迅が「小さき者へ」から受けた感動を読者に伝えたくて翻訳作業を行っていたまさにその頃、留学先の日本で『小さき者へ』の作品世界に共感したあまりに翻訳まで手掛けていた朝鮮人留学生がいた。東京帝国大学法学部に在学中の朴錫胤である。後に、国際法を研究しに英国ケンブリッジ大学に留学し、満州国の外交官僚として活躍した植民地期最高の朝鮮人エリート²²と言われた朴錫胤が、留学中に武郎の作品に心酔し、その感動を朝鮮の読者に紹介しようとした契機となったのは、同人として活動していた創造派とその同人誌『創造』に負うところが大きい。

22 水野直樹（「朴錫胤—植民地期最高の朝鮮人エリート」『講座 東アジアの知識人 第4巻 戦争と向き合っ』有志舎、2014）によれば、朴錫胤（1896～1948?）は植民地期朝鮮において最高のエリート知識人と言い得る人物だという。しかし、その名前は日本でも韓国でもあまり知られておらず、現在の韓国では植民地期の経歴によって「親日派」としてのみ記憶されている。以下にその経歴を紹介する。1911年普通学校を卒業した朴錫胤は日本に留学し、成城中学と第三高等学校、そして東京帝国大学法学部法律学科（イギリス専修）を卒業後、同学部の副手を務めたのち1923年帰国した。朝鮮では一時期教鞭を取ったり、新聞社の政治部記者を務めたりしていたが、京城帝国大学教授候補者として朝鮮総督府在外研究員に選ばれ、1925年英国に留学し、ケンブリッジ大学で国際法を研究した。1928年朝鮮に戻った朴錫胤は、大学内部での反対に会い、結局京城帝大の教授にはなれなかった。学者の道が許されなかったことを契機に、植民地支配側に身を寄せるようになった朴錫胤は、総督府の御用新聞『毎日申報』の副社長として、在満朝鮮人を組織した民生団の指導者として、満州国の外交官僚として栄達の道を歩んだ。解放後は、その親日的行為があだとなって「民族反逆者」として処刑されるに至った。

2-1. 1920年代の朝鮮文壇を虜にした有島武郎

『創造』（1919年2月～1921年6月通巻9号）は、1919年2月東京に留学中の仲間5人（金東仁、田榮澤、朱耀翰、金煥、崔承萬）が作った近代韓国最初の純文芸同人誌である。第3号（1919年12月）から同人となった朴錫胤は、小説「生の悲哀（一）」（第5号、1920年3月）と翻訳「어린것들에게（有島武郎作『小さき者へ』）」（第8号、1921年1月）、エッセイ「C兄へ（翻訳一篇）」（第8号）」の計3本を『創造』に発表している。他の同人と比べると、作品数においても、中身においても、その活動は非常に貧しいものと言わざるを得ないが、小説「生の悲哀」を読む限り、彼にはそもそも小説や詩を書く才能などないと言った方が正しいのかもしれない。二作目として発表した作品が、「生の悲哀（一）」の続きではなく翻訳を取り上げていたということはその端的な証拠であろう。しかも、この翻訳が近代的な子供観を促す契機となっていたとするならば、朴錫胤の時代を読む文学的感覚は『創造』の同人は無論、同時代の文学者に劣れるどころか、むしろ優れていると言わざるを得ない。

というのも、植民地期の朝鮮文壇では日本文学から直接、間接的に影響を受けていながらも、日本の作品を読んだり、その影響を受けたりしていたことに対して素直に認めようとしない、いわば日本への拒否感のような雰囲気があったからである²³。それゆえに、文学者たちは新聞や雑誌などメディアから影響を受けた作家や作品、愛読書を訊ねられると、真っ先に欧米文学を挙げるなど、できるだけ日本文学に触

23 拙著『媒介者としての国木田独歩—ヨーロッパから日本、そしてヨーロッパへ』（翰林書房、2014）33頁。

れないようにしていた²⁴。

日本文学への忌避現象は翻訳にも影響を及ぼし、植民地支配下の35年間、韓国語による日本文学の翻訳は十数編しかなく²⁵、肝心な小説はほとんど翻訳されていない。その主な作品をリストアップしてみると、以下のとおりである。

島崎藤村：詩²⁶「お菊」：朱耀翰訳(『創造』創刊号号、1919年2月)

蒲原有明：詩²⁷「皂夾」：朱耀翰訳(『創造』2号、1919年3月)

三木露風：詩²⁸「解雪」：黄錫禹訳(『廢墟』創刊号、1920年7月)

有島武郎：戯曲「死とその前後」：金東仁訳(『暁

光』7号、1920年9月)部分訳

有島武郎：小説「小さき者へ」：朴錫胤訳(『創造』8号、1921年1月)

葉山嘉樹：小説「淫売婦」：崔承一訳(『開闢』71号、1926年7月)

林房雄：評論「科学と芸術」：朴英熙訳(『開闢』71号、1926年7月)

有島武郎：評論「新旧芸術の交渉」：劉道順訳²⁹『朝鮮日報』1927年4月14日～5月5日、15回)

石川啄木：詩「果てしなき議論の後」：金相回訳(『新東亜』第二巻第二号、1932年2月)

このように、植民地期を通じて愛読されていた夏目漱石や国木田独步、芥川龍之介らの作品が一編も翻訳されていないだけでなく、植民地支配が進むにつれて翻訳そのものがほとんど見られなくなっている。なぜ朝鮮の知識人・文学者たちは日本文学の翻訳に関心を示さなかったのか。その理由として、植民地下で実施され

24 例えば、総合雑誌『三千里』が企画した「文学問題評論会」(『三千里』1934年7月号に掲載)に参加した朴英熙、朱耀翰、玄鎮健、梁白華、金東仁、金岸曙といった当時朝鮮文壇を代表する文学者たちは、「(4)どの作家のものを愛読したか」という質問に対して、いずれの作家も欧米作家を愛読していると答えている。参加者の中で金東仁と玄鎮健が日本人作家を挙げているが、その際には、まず欧米作家をあげた後、最後に日本人作家に触れているという具合である。金東仁の例を以下に示す「よく愛読する作家はいないが、作品涉筆の経路を見ると、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、ドストエフスキー等々。しかし、最も耽読したのはトルストイの著作です。東京のものは人道主義者の有島武郎のものなど」。

25 尹相仁「近代韓国における日本文学の翻訳と文化政治」(日本比較文学会編『越境する言の葉-世界と出会う日本文学』彩流社、2011)によれば、植民地期の朝鮮で朝鮮語に翻訳された日本文学は意外と少なく、徳富蘆花の小説『不如帰』(趙重桓訳、1913)と火野葦平の従軍記『麦と兵隊』(西村真太郎訳、1938)、そして菊池寛の小説『西住戦車長伝』(石島義原治訳、1941)の3種しかない。しかも、徳富蘆花の作品を除く、二作品は日中戦争勃発後の戦争への動員体制の整備を意図したいわゆる官製翻訳だったという事実を考慮すると、実質的に商品として流通された日本文学は趙重桓訳『不如帰』1編しかないということになる。もちろん、『不如帰』の他に日本文学の翻訳が全くなされなかったというわけではない。『創造』(1919年2月)や『開闢』(1920年6月)、『廢墟』(1920年7月)といった雑誌や新聞など連続刊行物には日本文学の翻訳が断片的に掲載されている。しかしながら、その数はわずかに2編しかないという。

26 島崎藤村(3編)の他に土井晩翠(1編)河井醉茗(1編)横瀬夜雨(1編)平木白星(1編)薄田泣菫(1編)の計6人8編の詩が翻訳された。

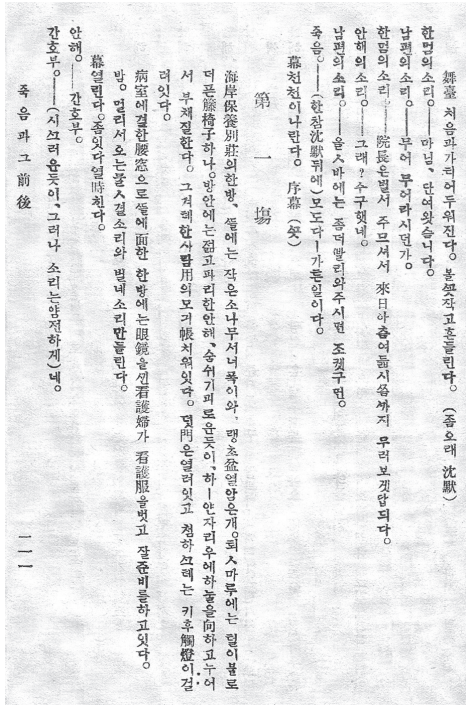
27 蒲原有明(2編)の他に岩野泡鳴(3編)三木露風(4編)北原白秋(7編)の計4人の16編の詩が翻訳された。

28 三木露風(1編)の他に蒲原有明(1編)日夏火之介(1編)北原白秋(1編)山宮允(2編)柳澤健(2編)西条八十(1編)萩原朔太郎(1編)岩野泡鳴(1編)の計9人の11編の詩が翻訳された。

29 ただし、この作品は『朝鮮日報』に発表された当初、「『新舊芸術の交渉』(一) 劉道順」というタイトルで連載が始まった。つまり、原著者名と訳者名を付ける、いわゆる翻訳の形をとっていなかったのである。それ故に有島武郎の読者から剽窃ではないのかという疑惑が巻き起こった。中でも有島の作品を耽読し、その影響を強く受けていた廉想渉は、「文芸万引き(一) (二)」という記事で『東亜日報』(5月10日・11日付)に寄稿し、『朝鮮日報』に連載中の「新旧芸術の交渉」は創作ではなく、故有島武郎の遺作を剽窃したものであると指摘し、そのような文芸窃盗が平然と行われていることに不快感を露わにした。指摘を受けた劉道順は、「『文芸万引』を読んで」(『朝鮮日報』5月22日付)を『朝鮮日報』に寄稿し、廉想渉の「文芸万引」が掲載される4日前の5月5日、「新旧芸術の交渉」の最終稿が『朝鮮日報』に掲載されたが、その際に「ここ数回にわたって連載された『新舊芸術の交渉』は大正十一年八月に信州木崎湖夏期大学で日本文学者、故有島武郎氏が講演したことを抄訳したものである」という付記を付けて、この論文が「自身の創作ではないことを明白に釈明した」と主張し、廉想渉の指摘が事実無根であると反論した。確かに、劉道順は原著者名を明かし、自分の創作ではないことを明らかにしているが、問題は時期である。連載がスタートしてから約一か月余り、原著者の情報を示す機会は十分にあったはずである。しかしながら、彼はその情報を最終回になるまで明かさなかった。今その理由を詮索する余裕はないが、この剽窃騒ぎは有島武郎が1920年代の朝鮮で如何に愛読されていたかを端的に示すエピソードにはかならない。

た言語教育（国語＜日本語＞と朝鮮語の二重言語政策）とそれに伴う文学教育³⁰や日本文学に対する文学者の姿勢³¹などが指摘されているが、唯一の例外が武郎だったのである。

リストからも分かるように、武郎の作品は評論を含め3本の作品が翻訳発表されている。文壇を挙げて日本文学と一定の距離をとっていた当時、武郎の作品が3本も翻訳されていたということは、それだけ彼の作品には他の日本人作家にはない共鳴共感する「いい言葉がたくさんあったことを意味するが、その「いい言葉」に誰よりも早く気付いたのが、部分訳とは終え、「死とその前後」を翻訳した金東仁なのである。



【図3】金東仁訳「死とその前後」（『曙光』7号、1920年9月）

2-2. 『宣言』への傾倒

当時、彼は啓蒙文学が幅を利かせていた朝鮮

文壇に新しい風を吹き込もうと留学仲間と『創造』を創刊したばかりであったが、その第3号（1919年12月）に掲載された自身の小説「心浅き者よ」の中で韓国近代文学史上初めて武郎の『宣言』に言及し、寸評をも行なっていたのである。朝鮮文壇をリードし始めた若き文学者が武郎の作品をどのように紹介していたのか、その箇所を見てみよう。

私は自分の事情と似ている小説を探し出し、そこから慰労を得ようと、まずダヌンツィオの『フランチェスカ・ダ・リミニ』を読んだ。パウロの恋人フランチェスカが、不本意ながらもパウロの兄に嫁いだものの、最後はパウロと情死する。そこから私の煩悶に対する解決は全く得られなかった。その次に、私はドストエフスキーの『貧しき人々』を読んだ。マッカールの恋人ブランカは愛してもいない人に嫁ぎ、マッカールの空しい叫びで終わっている。『フランチェスカ・ダ・リミニ』よりは煩悶の描き方はましだったが、これもやはり不満に終わった。有島武郎の『宣言』を読んだ。主人公の恋人だった女性が、主人公の友人のもとに行ってしまったことが描かれているが、最後は情けない終わり方をしている。他にも何冊かを読んだが、私の煩悶は募るばかりであって、少しも慰められなかった³²。
（拙訳、傍線は筆者）

注目したいのは、金東仁は武郎の『宣言』をダヌンツィオやドストエフスキーといった世界的文豪の作品に並ぶ恋愛小説の一つとして、『創造』の読者に紹介していたことだ。

『宣言』は、Y子という一人の女性をめぐる

30 丁貴連（2014）37-38頁。

31 尹相仁「韓国人にとって日本文学は何であるか」（館野哲訳『韓国における日本文学翻訳の64年』（s株式会社出版ニュース、2011）38-39頁。

32 金東仁「心浅き者よ」（『創造』1919年12月、創造社）29頁。

二人の若き青年の愛と友情との葛藤を描きたい
わゆる三角関係の恋愛小説である。一九一〇
年代当時の日本文壇には『宣言』の他にも、
夏目漱石の『それから』（1909）や『門』
（1910）、『こゝろ』（1914）、武者小路実篤
の『友情』（1919）など、インテリ青年の三角
関係を描いた小説は少なくない。しかし、金東
仁は『それから』でも、『友情』でもなく、武
郎の『宣言』を朝鮮の読者に紹介したのであ
る。

その反響は大きく、『創造』同人の田榮澤
は第6号（1920年5月）に発表した自伝的小説
「生命の春」の中で、「これまで読んだ文学書
はアルツイバシエフ³³の『サーニン』と日本の
有島武郎の『宣言』しかな³⁴」いと、早速『宣
言』を取り上げ³⁵、武郎への関心を示したので
ある。以後、『宣言』をはじめとする武郎の作
品は恋愛や結婚など人生問題に悩みを抱えてい
る若者を中心に多くの関心を集めるようになった。

その一人廉想渉は、韓国近代文学史を塗り替
えたと評される初期三部作の一つである「闇

夜」（『開闢』1922年1月）の中で、「不規則
に積まれた本の山から、有島武郎の「生れ出づ
る悩み」という短編集を取り出して、また横に
なった。五、六頁を一気に読み上げた彼の眼に
は訳の分からぬ涙が滲んだ³⁶」と、『生れ出づ
る悩み』について言及し、武郎ブームに拍車を
かけたのは周知の事実である³⁷。

2-3. 注目されなかった朝鮮語訳「小さき者へ」

まさに文壇を挙げての武郎ブームが巻き起こ
ろうとしたその矢先に、朴錫胤は高校時代から
耽読していた「小さき者へ」を訳し、1912年徳
富蘆花の小説『不如帰』が翻訳出版されて以
来、全く行われなくなっていた日本文学の全訳
を『創造』第8号（1921年1月）に発表したの
である。

33 ミハイル・ペトローヴィチ・アルツイバシエフ（1878～
1927）は、19世紀後半から20世紀前半のロシア文壇を代
表する作家である。その代表作『サーニン』は当時の若い
世代を中心に一世を風靡し、「サーニズム」という言葉
まで生んだ。

34 田榮澤「生命の春」（『創造』1920年5月）29頁。以下は
『宣言』について言及された箇所全文である。「だけれ
ども、未だ彼には芸術が生活の中心になっていると言え
るほど芸術に対する情熱と真摯な態度はないのである。彼の
過去半年間（いや一年間）——無論、彼の妻が監獄に入
ったという事情はあるけれど——これまで読んだ文学書はア
ルツイバシエフ『サーニン』と日本の有島武郎の『宣言』
しかなく、彼自身の作品といっても南山岬教会青年会季刊
雑誌「大同江」に掲載した「平壤城を眺めながら」という
小説と、彼が同人となっている朝鮮に一つしかない純文芸
雑誌『創造』に掲載された「呉東俊」という短編小説があ
るだけである。」（拙訳、下線は筆者）

35 田榮澤が武郎の『宣言』の影響を強く受けていたことは
よく知られた事実である。しかし金東仁と違って、田榮
澤は自分が読んでいた作家、とりわけ日本文学に関し
ては具体的な作品名を語っておらず、『宣言』も読ん
でいたかどうか、これまで明らかにされていなかった。
しかし、田榮澤は『宣言』を読んでいただけではなく、
金東仁と同じく自身の作品の中で武郎の『宣言』につ
いて言及していた。そのことを本論文で指摘することがで
きたのは幸いである。

36 廉想渉「闇夜」（『開闢』1922年1月）62-63頁。以下
は『生れ出づる悩み』が言及された箇所の全文である。
「家に帰った彼は、そうと靴を抜いてそのまま自分の部
屋に入った。そして、服を脱ぎ捨ててすぐに横になっ
た。目をつぶって寝ようとしたが、再び起き上がって不
規則に積まれた本の山から、有島武郎の「生れ出づる悩
み」という短編集を取り出して、また横になった。五、
六頁を一気に読み上げた彼の眼には訳の分からぬ涙が滲
んだ。彼はわざと拭こうともしないで、そのまま壁に向
かって横になったまま再び一頁から読み直した。彼の涙
はまだ乾いていなかった。一〇頁、二〇頁くらい（中
略）それは彼の生涯の中で初めて経験する涙なのであ
った」（拙訳、下線は筆者）。

37 以後も廉想渉は、『開闢』や『朝鮮文壇』、『東亜日
報』といったメジャーの雑誌と新聞に発表した小説『除
夜』（1922）と『お前たちは何を待たのか』（1923年8
月29日～1924年2月5日、129回連載）、批評（『朝鮮
文壇』合評会、1925）、評論「文芸万引」（1927）など
を通して武郎の文学と思想、その生き方への関心と理解
を示し続けた。

他にも、一記者（1920年7月）、妙香山（1921年1
月）、黄錫禹（1923年4月）、金旭濟（1923年9月）、
朴鐘和（1924年2月）、八峰山人（1924年2月）、C生
（1926年8月9日付『東亜日報』）、西江K生（1926年
8月14日付『東亜日報』）、緑眼鏡（1928年）、白シラ
（1928年）といったジャーナリストから小説家、詩人、
評論家、女流作家、一般読者に至るまでまさに文壇をあ
げて有島武郎の作品と思想、情死事件などについて言及
している。武郎への関心は1930年代に入っても衰えるど
ころか、むしろ勢いを増していった。その詳細は金希貞
「韓国における有島武郎の受容様相」（『日本語文学』
第70輯、2015年10月号）を参照されたい。

このように、魯迅の訳した「小さき者へ」は『新青年』に初めて翻訳紹介されてから注目を集め、文壇は無論、一般読者の間で広く読まれていたのである。それに対する朝鮮語訳が注目を集めなかったのはなぜか。

(次号につづく)

参考文献

- ・『有島武郎全集』（1980-1988）筑摩書房
- ・有島武郎研究会編（2010）『有島武郎事典』勉誠出版
- ・綾目浩治（2004）『倫理的で政治的な批評—日本近代文学の批判的研究』皓星社
- ・伊藤虎丸（1983）『魯迅と日本人—アジアの近代と「個」の思想』朝日新聞社
- ・尹相仁（2011）「近代韓国における日本文学の翻訳と文化政治」
- ・尹相仁（2012）「韓国人にとって日本文学は何であるか」
- ・金希貞（2015）「韓国における有島武郎の受容様相」
- ・栗田廣美（2011）『愛と革命・有島武郎の可能性』右文書院
- ・周作人（1996）『周作人日記 上 影印本』大象出版社
- ・丁貴連（2014）『媒介者としての国木田独歩—ヨーロッパから日本、そして朝鮮へ』翰林書房
- ・『魯迅全集』（1984-1986）学習研究社 李雪（2011）「中国における日本近代文学の初期受容」
- ・山本芳明（2000）『文学者はつくられる』ひつじ書房
- ・山田敬三（1976）『魯迅の世界』大修館